

# 白山チブuri尾根の秋期の鳥類

上馬 康生 石川県白山自然保護センター

## BIRD COMMUNITY IN AUTUMN OF CHIBURI RIDGE IN MT. HAKUSAN

Yasuo UEUMA, *Hakusan Nature Conservation Center, Ishikawa*

### はじめに

白山チブuri尾根の鳥類に関しては、繁殖期である5月～7月の環境別の群集構造について明らかにしているが(上馬, 1985), 今回はその続報として, 8月から11月にかけての秋期の群集について述べ, 繁殖期と比較してみる。なお, この報告の一部は, 環境庁委託の国設鳥獣保護区管理で筆者が行った鳥獣の生息状況調査の結果を用いた。

### 調査地及び調査方法

調査は, 1981年から1986年までの8月～11月に, 多い地区で月に8回, 少ない地区で月に5回行った。調査方法は前報と同じで, 原則として出発点の市ノ瀬を日の出時刻頃に出て, 線センサス法により記録しながら登山道を登っていく方法をとった。記録に際しては, 地形図および高度計により各個体の位置をできるかぎり正確にするようにし, 個体数集計にはセンサスコースの両側各50m以内に出現した全ての鳥の記録を用いた。また前報と同様に全コースを環境別に3つに区分してとりまとめた。すなわち, 出発点の市ノ瀬(標高830m)から猿壁堰堤(標高930m)までのドロノキ林やスキ草原の多い河原のI区, 猿壁堰堤から標高1650mまでのブナ林のII区, 標高1650mから御舎利山(標高2380m)までのアオモリトドマツ林やダケカンバ林のIII区である(詳細は前報を参照のこと)。

なお, その日の天候や積雪の状態などにより, 同じ距離でも調査時間の長かかった時や途中で調査を中断したり, 打ち切ったこともあり調査条件が必ずしも一定しなかった。特に調査時刻が遅くなり, 霧がかかるなど天候の変りやすいIII区においてこの傾向が強かった。

### 結果及び考察

調査期間中にコース全体で記録された鳥類は, センサス範囲の周辺を含めて54種となった。これに前回の繁殖期の調査結果を合せると66種となる。3つの環境区分別に各月ごとに集計すると表1～表11のようになる。なお, 表中の個体数は確認できた最少の数値で表しており, \*で示したのは下山の時など調査時刻が異なる時の記録や50mの観察範囲外で確認したもので, 表の調査時刻にみられなかった種を参考のために示し, 種数以外の集計には用いていない。

#### I区

#### 8月

調査回数は6回で, 調査距離は合計8.4kmであった。出現種数は13種, 相対密度6.67羽/kmであっ

た。優占度の高いのは、ホオジロ33.9%、ウグイス14.3%、シジュウカラ14.3%、キセキレイ8.9%などである。ホオジロは毎回出現しており、その他ウグイス67%、キセキレイ50%の出現頻度が高い(表1)。

表1 白山チブリ尾根鳥類集計結果 (I区、8月)

調査年月日	83.8.3 5:03 ~5:23 23分 晴	85.8.8 5:15 ~5:37 22分 晴	81.8.20 5:10 ~5:35 25分 快	84.8.23 5:20 ~5:45 25分 曇	82.8.26 5:18 ~5:42 24分 快	86.8.28 5:40 ~6:07 27分 晴	個体数合計	相対密度	相対優占度	出現頻度
ホウシ	3	4	6	2	2	2	19	2.26	33.9	100
オグ	3	2	1		2	2	8	0.95	14.3	67
シジュウ			1	2	4	4	8	0.95	14.3	33
キセ			2	2	1	1	5	0.60	8.9	50
カハシ		1	1		2	1	3	0.36	5.4	33
ハシ	1				1	1	2	0.24	3.6	33
ボソ				1	1		2	0.24	3.6	33
ガラ					1		2	0.24	3.6	33
スリ			2				2	0.24	3.6	17
ガメ						2	2	0.24	3.6	17
セイ	1						1	0.12	1.8	17
イラ	1						1	0.12	1.8	17
合計(13種)	9	7	12	5	12	11	56	6.67	—	—

調査年月日の83は1983年、相対密度は1kmあたりの個体数、相対優占度及び出現頻度は百分率(%)\*は調査時間外及び範囲外の記録を表す。なお積雪のある時はその数値を、また調査範囲が本文と異なる場合は、最高到達高度を欄外に記入した。

### 9月

調査回数は5回で、調査距離は合計7.0kmであった。出現種数は15種、相対密度10.43羽/kmであった。優占度の高いのは、ホオジロ26.0%、エナガ16.4%、ウグイス13.7%、カケス12.3%などである。8月に続いてホオジロが毎回出現しており、ウグイス80%、キセキレイ80%、カケス60%、ハシボソガラス60%の出現頻度が高い(表2)。

### 10月

調査回数は8回で、調査距離は合計11.2kmであった。出現種数は14種、相対密度8.39羽/kmであった。優占度の高いのは、ホオジロ36.2%、ウグイス18.1%であり、この2種は出現頻度も高く、ウグイス88%、ホオジロ75%であった(表3)。

### 11月

調査回数は7回で、調査距離は合計9.8kmであった。出現種数は10種、相対密度4.08羽/kmであった。優占度の高いのは、ツグミ35%、ホオジロ17.5%、セグロセキレイ12.5%である。いずれの種も出現頻度は低く、7回中1回か2回しか出現していない(表4)。

秋の全期間を通じて優占度が高いのはホオジロで、ウグイスも10月までは優占度が高い。これらの鳥は出現頻度も10月まで高く、秋期のI区を代表する種といえる。しかし11月になるとウグイスは出現しなくなり、ホオジロも中旬までである。次いで個体数が多く、比較的よく出現しているのはハシボソガラスである。エナガ、シジュウカラ、カケスなども個体数は多いが、出現頻度は高くない。毎月出現している種としてはホオジロの他にカケス、ハシボソガラス、カワガラス、ミソサザイがある。前報で述べた繁殖期の種構成と比較すると、繁殖期に最優占のカケス、優占度3位のキセキレイ、4位のヒヨドリは個体数が減り、ヒヨドリは9月以降、キセキレイは10月中旬以降現れおらず、逆にウグイスが繁殖期より増えるなど優占種にかなりの違いがみられる。また相対密度は、繁殖期の11.36と比べると8月の6.67や11月の4.08が特に低い。冬鳥として10月のアトリ、11月のツグミ、ジョウビタキがあげられる。9・10月のメボソムシクイはI区より標高の高いところから移動してきたり、渡

上馬：白山チブリ尾根の秋期の鳥類

表2 白山チブリ尾根鳥類集計結果（I区、9月）

調査年 調査月 調査日 調査時刻 調査時間 調査天気	86.9.11 5:50 ~6:19 29分 晴	84.9.15 5:38 ~6:02 24分 晴	82.9.18 5:33 ~5:59 26分 晴	81.9.22 5:30 ~5:56 26分 快晴	85.9.30 6:00 ~6:25 25分 晴	個体 数合計	相対 密度	相対 優占度	出現 頻度
ホエウカハキミヤセシメコキヤカ	2	1	2	12	2	19	2.71	26.0	100
オグナイグケソマセグシメコキヤカ	1	12	5	2	2	12	1.71	16.4	20
ジロガス	3		2	2	4	10	1.43	13.7	80
ラスイ	3		1	4		9	1.29	12.3	60
セイライ	1	1	2	1		8	0.71	6.8	80
イライ		1	1	1		2	0.29	2.7	40
ライ			1	1		2	0.29	2.7	40
トラ	1			1	2	2	0.29	2.7	20
ミス	1		1			1	0.14	1.4	20
		1				1	0.14	1.4	20
			1			1	0.14	1.4	20
						1	0.14	1.4	20
	*	*							
合計（15種）	12	16	15	20	10	73	10.43	—	—

表3 白山チブリ尾根鳥類集計結果（I区、10月）

調査年 調査月 調査日 調査時刻 調査時間 調査天気	83.10.1 5:48 ~6:15 27分 晴	81.10.3 6:15 ~6:42 27分 曇	86.10.6 6:13 ~6:40 27分 晴	81.10.15 6:00 ~6:22 22分 晴	82.10.15 6:00 ~6:25 25分 晴	84.10.18 6:23 ~6:47 24分 晴	83.10.19 6:00 ~6:25 25分 曇	85.10.24 6:30 ~6:54 24分 晴	個体 数合計	相対 密度	相対 優占度	出現 頻度
ホウハシエメカキカミトアコア	5	1	5	11	9	4	4	1	34	3.04	36.2	75
オグナイグケソマセグシメコキヤカ	2	1	1	1	4	4	3		17	1.52	18.1	88
ジロガス		1	4	6	2	2			9	0.80	9.6	38
ラスイ					2	8			9	0.71	8.5	38
セイライ	1		1	*	4				8	0.71	8.5	13
イライ		1			1				5	0.45	5.3	25
ライ									4	0.36	4.3	25
トラ	1				1	1		1	2	0.18	2.1	25
ミス						1		1	2	0.18	2.1	25
						1		1	1	0.09	1.1	13
						1		1	1	0.09	1.1	13
					1	1		1	1	0.09	1.1	13
						1		1	1	0.09	1.1	13
合計（14種）	12	4	11	18	23	16	8	2	94	8.39	—	—

表4 白山チブリ尾根鳥類集計結果（I区、11月）

調査年 調査月 調査日 調査時刻 調査時間 調査天気	83.11.10 6:35 ~7:00 25分 晴	81.11.14 6:29 ~6:47 18分 晴	86.11.17 7:50 ~8:15 25分 曇	81.11.20 8:10 ~8:36 26分 曇	85.11.21 7:20 ~8:05 45分 晴	81.11.28 6:55 ~7:15 20分 小雪	82.11.29 10:00 ~10:25 25分 曇	個体 数合計	相対 密度	相対 優占度	出現 頻度
ツホセカハミコカヤジ	6	8	6					14	1.43	35	29
グレイ	2		1		3			7	0.71	17.5	29
ジョ				*	2		*	5	0.51	12.5	29
オグナイグケソマセグシメコキヤカ		2		2	2			4	0.41	10	29
ラスイ		2						4	0.41	10	29
セイライ		1		2		1		2	0.20	5	29
イライ				1		1		2	0.20	5	14
ライ						1		1	0.10	2.5	14
トラ		*				1		1	0.10	2.5	14
ミス									—	—	—
合計（10種）	8	13	7	5	5	2		40	4.08	—	—

積雪30cm

積雪10cm

りの途中の個体と考えられ、11月のコガラも、繁殖期にはI区では全く見られずII区には多い種であるので、標高の高いところから移動してきたものと考えられる。また9・11月のセグロセキレイも繁殖期には全くみられない種である。繁殖期にキセキレイがみられ、9～10月にキセキレイがみられなくなった頃に、それに入れかわるようにセグロセキレイが現れるのは、白山山系北部の犀川上流の山間部でもみている現象であるが(上馬, 1979), 両地域とも、より下流には一年中みられるところがあるので、おそらく2つの種の力関係に起因しているものと考えられる。種数は秋期全体で23種であった。

II区

8月

調査回数は6回で、調査距離は合計22.2kmであった。出現種数は21種、相対密度10.59羽/kmであった。優占度の高いのは、シジュウカラ16.6%、ヒガラ15.7%、カケス14.9%、ゴジュウカラ11.9%である。カケス、ミソサザイ、メボソムシクイが毎回出現しており、シジュウカラ、ヒガラ、ゴジュウカラ、ウグイスが83%、クロジ、ホシガラスが67%と出現頻度が高い(表5)。

表5 白山チブリ尾根鳥類集計結果 (II区、8月)

調査年月日 調査時刻 調査時間 調査天気	83.8.3 5:25 ~7:50 110分 晴	85.8.8 5:37 ~8:26 143分 晴	81.8.20 5:35 ~8:25 145分 快晴	84.8.23 5:55 ~8:30 132分 曇	82.8.26 5:47 ~8:22 145分 快晴	86.8.28 6:10 ~9:00 138分 晴	個体 数合 計	相 対 密 度	相 対 優 占 度	出 現 頻 度
シジュウカラ	4	7	4	2	22	4	39	1.76	16.6	83
ヒガラ	1	3	5	2	23	3	37	1.67	15.7	83
カケス	1	2	27	1	3	1	35	1.58	14.9	100
ゴジュウカラ	9	1	*	3	9	6	28	1.26	11.9	83
シジュウカラ	8	5	*	4	7	2	20	0.90	8.5	50
ミソサザイ	3	1	3	3	4	1	17	0.77	7.2	100
メボソムシクイ	1	3	1	3	6	1	15	0.68	6.4	100
ウグイス	2	1	2	1	3		9	0.41	3.8	83
クロジ	2	4	1	1			8	0.36	3.4	67
ホシガラス		3			4	1	8	0.36	3.4	50
アオゲラ	2	1			1	1	5	0.23	2.1	67
ヤブサメ		2	*		1	1	3	0.14	1.3	33
アカササギ	1				1		2	0.09	0.9	33
アカカササギ				1		1	2	0.09	0.9	33
オオカササギ			1		1	1	1	0.05	0.4	17
オオキキウ					1		1	0.05	0.4	17
ウグイス	1				1		1	0.05	0.4	17
シジュウカラ					1	1	1	0.05	0.4	17
ヒガラ						1	1	0.05	0.4	17
カケス							1	0.05	0.4	17
ゴジュウカラ							1	0.05	0.4	17
シジュウカラ						*	—	—	—	—
合計(21種)	34	33	44	18	86	20	235	10.59	—	—

9月

調査回数は5回で、調査距離は合計18.5kmであった。出現種数は26種、相対密度15.57羽/kmであった。優占度の高いのは、ヒガラ22.9%、ゴジュウカラ18.1%、シジュウカラ14.2%である。ヒガラ、ゴジュウカラ、シジュウカラ、カケス、メボソムシクイ、コゲラが毎回出現しており、コガラ、ウグイス、アオゲラも80%と出現頻度が高い(表6)。

10月

調査回数は8回で、調査距離は合計28.8kmであった。出現種数は28種、相対密度24.69羽/kmであった。優占度の高いのは、ヒヨドリ21.7%、アトリ13.5%、ヒガラ11.1%、ゴジュウカラ8.9%などであるが、ヒヨドリは通過していく群れで、この地区との関わりはあまりないと思われる。ゴジュウカラが毎回出現しており、ヒガラ、シジュウカラ、コガラ、ミソサザイは88%、コゲラ、ホシガラスが75%と出現頻度が高い(表7)。

上馬：白山チブリ尾根の秋期の鳥類

表6 白山チブリ尾根鳥類集計結果（II区、9月）

調査年月日	86.9.11 6:19 ~9:00 134分 晴	84.9.15 6:02 ~8:52 158分 晴	82.9.18 5:59 ~9:05 161分 晴	81.9.22 5:56 ~8:55 151分 快晴	85.9.30 6:30 ~9:30 139分 晴	個体 数合 計	相対 密度	相対 優占 度	出現 頻度
ヒゴシカ	10	7	12	16	21	66	3.57	22.9	100
ジュウカ	14	11	13	12	2	52	2.81	18.1	100
シカ	8	2	12	8	11	41	2.22	14.2	100
カ	2	1	1	3	2	21	1.14	7.3	100
コメ	5	2	4	4	6	17	0.92	5.9	80
ボ	1	4	1	8	1	15	0.81	5.2	100
ウ	1	1	2	4	5	13	0.70	4.5	100
ア	2	1	5	1	2	9	0.49	3.1	80
ヤク	5	2		2	1	7	0.38	2.4	80
ク	1				1	6	0.32	2.1	40
エ	1		*	1	3	5	0.27	1.7	60
ホ	5					5	0.27	1.7	20
ミ	2	1	1	3	*	5	0.27	1.7	60
ヤ	2	1	1	1		4	0.22	1.4	60
キ	2	1	1	1		3	0.16	1.0	60
ウ	2	2	2	1		3	0.16	1.0	40
マ	2	2	2	2		2	0.11	0.7	20
オ	2	2	2	2		2	0.11	0.7	20
ア	2	2	2	2	1	2	0.11	0.7	40
コ	2	2	2	2		2	0.11	0.7	20
ホ	1	1	1	2		1	0.05	0.3	20
オ	1	1	1	1		1	0.05	0.3	20
エ	1	1	1	1		1	0.05	0.3	20
ヤ	1	1	1	1		1	0.05	0.3	20
キ	2	2	2	1		2	0.11	0.7	20
合計（26種）	56	44	67	65	56	288	15.57	—	—

表7 白山チブリ尾根鳥類集計結果（II区、10月）

調査年月日	83.10.1 6:15 ~8:25 113分 晴	81.10.3 6:57 ~10:05 163分 曇、小雨	86.10.6 6:43 ~9:30 130分 曇	81.10.15 6:25 ~9:10 142分 快晴	82.10.15 6:35 ~8:50 135分 晴	84.10.18 6:50 ~10:45 146分 晴	83.10.19 6:30 ~8:23 106分 曇、小雨	85.10.24 6:54 ~8:52 113分 曇、小雨	個体 数合 計	相対 密度	相対 優占 度	出現 頻度
ヒ	4		150						154	5.35	21.7	25
ア					25	32		15	96	3.33	13.5	50
ヒ	13	10	13	5	11	25	24	2	79	2.74	11.1	88
ゴ	7	3	14	8	12	12	4	3	63	2.19	8.9	100
マ					5	50			55	1.91	7.7	25
シ	5	5	3	8	8	12	5		46	1.60	6.5	88
ク	2			23	8			*	35	1.22	4.9	38
コ	2	2	8	8	6	3	2		31	1.08	4.4	88
シ			9		8		6		23	0.80	3.2	38
エ			7		12			*	21	0.73	3.0	38
ミ	3	4		2	4	3	2	1	19	0.66	2.7	88
ウ							16	1	17	0.59	2.4	25
コ	6		2	3	1	4		1	12	0.42	1.7	50
ホ	1	3	1	1	1	2	2	*	12	0.42	1.7	75
マ		1	2	1	1	1			8	0.28	1.1	75
ア				8	1	1			8	0.28	1.1	13
メ	1		1	1	3	1			5	0.17	0.7	38
キ		1	2	2		1			4	0.14	0.6	50
オ				2					4	0.14	0.6	25
ヤ	1	1		1	2				4	0.14	0.6	25
カ	1								3	0.10	0.4	38
イ	2			1					2	0.07	0.3	25
エ			2						2	0.07	0.3	13
ヤ									2	0.07	0.3	13
コ	1								1	0.03	0.1	13
ル	1								1	0.03	0.1	13
ウ	1								1	0.03	0.1	13
キ	2						1		1	0.03	0.1	13
合計（28種）	56	34	221	72	98	145	62	23	711	24.69	—	—

1550m 1550m

11月

調査回数は7回で、調査距離は合計22.4kmであった。出現種数は20種、相対密度19.42羽/kmであった。優占度の高いのは、ツグミ18.6%、アトリ17.5%、コガラ14.0%、ゴジュウカラ12.0%である。ゴジュウカラが9月・10月に引き続き毎回出現しており、コガラ、コゲラ、シジュウカラが86%、ツグミが71%とよく出現している(表8)。

表8 白山チブリ尾根鳥類集計結果(II区、11月)

調査年月日	83.11.10 7:02 ~8:58 166分 晴	81.11.14 6:50 ~9:20 130分 晴	86.11.17 8:15 ~11:40 137分 曇	81.11.20 8:36 ~10:50 134分 曇	85.11.21 8:05 ~14:18 275分 晴	81.11.28 7:15 ~9:25 120分 曇	82.11.29 10:25 ~12:00 95分 曇	個体数合計	相対密度	相対優占度	出現頻度
ツグミ	1	5	22	51		2		81	3.62	18.6	71
アトリ	16	1	*	60	27	16		76	3.39	17.5	29
コガラ	7	4	7	11	12	5	1	61	2.72	14.0	86
ゴジュウカラ		1	*	10	17	6	6	52	2.32	12.0	100
マヒワ		10	*	18			*	36	1.61	8.3	43
ハシロ				15				25	1.12	5.7	29
コゲラ	2	2	1	3	7	4	25	25	1.12	5.7	14
シジュウカラ						1	*	19	0.85	4.4	86
ルリビタキ	2	1	1	2	4		18	19	0.85	4.4	29
キバタキ	1	1	2		1		2	12	0.54	2.8	86
シロハラ	1					2		5	0.22	1.1	57
ヒヨドリ	3		*		1		2	5	0.22	1.1	43
ツバメ			1			2		4	0.18	0.9	29
ヒメドリ	2							3	0.13	0.7	29
ヒメツバメ	1		1				*	2	0.09	0.5	14
ヒメシロ		2						2	0.09	0.5	29
ヒメツバメ		1	*		1			2	0.09	0.5	29
ヒメツバメ		1	*			1		2	0.09	0.5	29
ヒメツバメ								1	0.04	0.2	14
ヒメツバメ								1	0.04	0.2	14
合計(20種)	36	29	35	170	71	40	54	435	19.42	—	—

1550m 1500m 1650m 1500m 1650m 1550m 1300m  
積雪50cm 積雪15cm 積雪100cm 積雪40cm

繁殖期を通じてII区に優占していた種はヒガラ、コガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラなどの留鳥と考えられる種と、コルリ、キバタキなどの夏鳥であるが(上馬, 1985)、秋期は、留鳥と考えられるこれら4種にカケスを加えたものが優占する8・9月と、これら4種にアトリ、ツグミ、マヒワなどの冬鳥が加わる10・11月とに区別することができる。8月と9月は全体の種構成も優占上位の種も非常に似ているが、10月と11月は優占上位種がかなり異なっている。それは出現頻度は低いものの群れで出現しているヒヨドリ、マヒワ、アトリ、エナガなどの個体数が多いためである。相対密度は、繁殖期の16.92と比べると8月が10.59と低いが、その他の月は10月のヒヨドリを除くと繁殖期とほぼ同じといえる。旅鳥や冬鳥等の渡来時期としては、9月中旬と10月上旬にエゾビタキが立ち寄り、10月上旬にヒヨドリが通過していくのがみられ、シロハラが10月上旬に、アトリ、マヒワ、マミチャジナイ、ツグミが10月中旬に渡来しているのがみられる。これらの中でツグミ、アトリ、マヒワは11月下旬でもこの地区にみられる。また1回だけの記録であるがハギマシコの群れが11月下旬に出現している。その他では、繁殖期にII区ではみられないルリビタキが10・11月に少数ながら出現しているが、この鳥は繁殖期にはより標高の高いところ(III区では優占種)にみられることから、秋期になって下ってきたものであろう。留鳥と思われる種の中ではゴジュウカラやコガラは期間を通して個体数は多いが、シジュウカラやヒガラは11月には減少し、特にヒガラの個体数および出現回数の減少が著しい。ヒガラやシジュウカラの大部分はより低標高地へ移動していることが考えられる。その他で毎月出現

上馬：白山チブリ尾根の秋期の鳥類

しているものにコゲラ、アカゲラ、アオゲラ、オオアカゲラのキツツキ類とミソサザイ、ホシガラス、カケスがある。比較的個体数の多い種の中で他にはメボソムシクイとクロジが10月中旬まで、ウグイスが10月下旬まででみられなくなっている。またエナガは比較的大きな群れでみられるが出現頻度は低く、8月にはみられていない。次に白山での記録の稀な種としてキバシリが1982年8月26日に出現している。種数は10月が28種と最も多く、秋期全体では39種となる。

Ⅲ区

8月

調査回数は6回で、調査距離は合計11.3kmであった。出現種数は14種、相対密度9.73羽/kmであった。優占度の高いのは、メボソムシクイ27.3%、ヒガラ21.8%、ウグイス19.1%である。出現頻度が高いのはメボソムシクイ100%、ウグイス86%である(表9)。

表9 白山チブリ尾根鳥類集計結果(Ⅲ区、8月)

調査年月日	83.8.3 7:50 ~10:24 98分 霧	85.8.8 8:26 ~8:58 32分 霧雨強風	81.8.20 8:25 ~9:26 31分 快晴	84.8.23 8:30 ~9:10 40分 霧	82.8.26 8:22 ~9:22 50分 晴、強風	86.8.28 9:00 ~9:40 30分 霧、強風	個体数 合計	相対 密度	相対 優占度	出現 頻度
メボソムシクイ	13	2	9	2	2	2	30	2.65	27.3	100
ヒガラ	11	2	24	1	1		24	2.12	21.8	17
ウソ	5		6	1	1		21	1.86	19.1	86
カヤクグリ	4	1	*	1	1		7	0.62	6.4	50
コルマシ	2	1	2				6	0.53	5.5	50
アマミ	3						5	0.44	4.5	50
シマ				3			3	0.27	2.7	17
カク	2						3	0.27	2.7	17
シマ		1	*				2	0.18	1.8	17
カク			*	1		1	2	0.18	1.8	33
シマ				2			2	0.18	1.8	33
カク					2		2	0.18	1.8	17
シマ			1				2	0.18	1.8	17
カク							1	0.09	0.9	17
合計(14種)	40	7	42	11	6	4	110	9.73	—	—
	2380m	1910m	1910m	1910m	1910m	1910m				

9月

調査回数は5回で、調査距離は合計9.3kmであった。出現種数は16種、相対密度9.57羽/kmであった。優占度の高いのは、カケス15.7%、ヒガラ14.6%、メボソムシクイ13.5%、ウソ12.4%、ウグイス12.4%である。ヒガラ、メボソムシクイ、ウソが毎回出現しており、ウグイス、シジュウカラも80%と出現頻度が高い(表10)。

10・11月

調査回数は7回で 調査距離は合計17.4kmであった。出現種数は20種、相対密度11.95羽/kmであった。優占度の高いのは、ヒガラ40.4%、アトリ13.9%である。ホシガラスが86%、ヒガラ、カヤクグリ、ルリビタキが71%と出現頻度が高い(表11)。

メボソムシクイ、ウグイス、カヤクグリ、ルリビタキが、Ⅲ区の繁殖期を通じて毎回出現しかつ優占種であった。8月上旬にはまだこの傾向がみられるが、その後はこれらの個体数は減少し、8月のヒガラ、9月のカケス、ヒガラ、10月のヒガラ、アトリ、イワツバメなどいずれも群れで数多く出現している鳥が優占種となっている。これらの中ではヒガラを除くといずれも出現頻度の高くない種である。すなわち繁殖期やⅡ区のブナ林のように、秋期を通じて優占する種は少なく種構成の安定性はみられない。また相対密度は、繁殖期の16.00と比較するとどの月も低くなっている。ヒガラは繁殖期

表10 白山チブリエ尾根鳥類集計結果 (III区、9月)

調査年月日	時刻	86.9.11 9:00 ~9:55	84.9.15 8:58 ~9:42	82.9.18 9:05 ~10:35	81.9.22 8:55 ~9:51	85.9.30 9:30 ~10:45	個体 数合 計	相 対 密 度	相 対 優 占 度	出 現 頻 度
カヒメウ	ケガムシ	1	1	7	6	2	14	1.51	15.7	60
メソム	ソシク	2	5	1	8	1	13	1.40	14.6	100
ウソ	スライ	5	1	1	3	3	12	1.30	13.5	100
シジュウ	イソ	3	1	3	1	3	11	1.18	12.4	100
ホシガ	ウカ		1	1	2	5	11	1.18	12.4	80
カイ	ラ	5	1	1	1	8	7	0.86	9.0	80
ツ	ス	2				7	0.75	7.9	60	
ツ	ラ				1	3	0.32	3.4	40	
ツ	グ					2	0.22	2.2	20	
ツ	バ	1		1	1	2	0.22	2.2	40	
ツ	メ					1	0.11	1.1	20	
ツ	シ			1		1	0.11	1.1	20	
ツ	キ			1		1	0.11	1.1	20	
ツ	リ			1		1	0.11	1.1	20	
ツ	ト			1		1	0.11	1.1	20	
ツ	ラ			1		1	0.11	1.1	20	
ツ	キ			1		1	0.11	1.1	20	
合計 (16種)		20	9	19	23	18	89	9.57	—	—

2065m 1910m 2010m 1910m 1910m

表11 白山チブリエ尾根鳥類集計結果 (III区、10・11月)

調査年月日	時刻	81.10.3 10:05 ~12:54	86.10.6 9:30 ~12:35	81.10.15 9:20 ~10:15	82.10.15 8:50 ~12:15	84.10.18 11:02 ~11:47	86.11.17 11:40 ~12:40	85.11.21 14:30 ~17:55	個体 数合 計	相 対 密 度	相 対 優 占 度	出 現 頻 度
ヒア	ガ	1	43	2	36	2			84	4.82	40.4	71
イ	ト		1	8	20				29	1.67	13.9	43
カ	バ	3	18		6	1			18	1.03	8.7	14
ホ	グ	1	3	2	1	1		*	15	0.86	7.2	71
シ	ラ	1	3	2	3	1	2		10	0.57	4.8	86
ジュ	ウ		4		1				8	0.46	3.8	43
ウ	カ	1	5	1	1	1	1		7	0.40	3.4	43
ル	ビ		1						5	0.29	2.4	71
カ	イ		3				2		5	0.29	2.4	29
ゴ	ケ		3	1				*	4	0.23	1.9	29
ビ	ウ		2						4	0.23	1.9	29
コ	カ		1		3		2		4	0.23	1.9	29
メ	ラ		3		2				3	0.17	1.4	14
ソ	イ					3			3	0.17	1.4	14
ツ	ミ							*	3	0.17	1.4	14
イ	シ	1							1	0.06	0.5	14
コ	ラ		1					*	1	0.06	0.5	14
オ	カ				1				1	0.06	0.5	14
ノ	リ				1				1	0.06	0.5	14
イ	カ				1				1	0.06	0.5	14
ノ	リ				1		1		1	0.06	0.5	14
合計 (20種)		8	90	17	74	9	8	2	208	11.95	—	—

2380m 2380m 1910m 2380m 1910m 1910m 1910m 積雪5cm 積雪200cm

のIII区では多くない種であるが、秋期にはよく出現し、時に20羽~40羽の大群でみられる。シジュウカラも繁殖期には稀であるが、9月から10月によく出現している。夏鳥であるメソムシクイは10月上旬までみられた。またウグイス、カヤグリ、ヒガラは11月になるとみられなくなることから、より標高の低い地域への移動が考えられる。その他毎月みられ出現頻度も比較的高い種としてはウソとホシガラスがある。次にイスカが1986年11月17日に調査範囲内で1羽 (実際には数羽以上の群れ) 観察されたが、白山では稀な記録である。種数は秋期全体で28種となり、II区と同様10月が最も多い。



お わ り に

3つの環境の中で相対密度が最も高かったのはII区のブナ林の10月であり、またII区の各月の相対密度はどれも他の地区より高く、種数も多かった。また秋期の鳥類相を繁殖期と比較すると、夏鳥の減少、旅鳥や冬鳥の増加は当然あるもののII区が優占種、相対密度、種数など最も類似性が高かった。これらのことは、原生状態に近いブナ林では、初夏から夏にかけての繁殖期のみならず秋期も鳥類の生息環境として優れていることを示している。次に、標高差をともなった環境のちがいにより鳥類相の季節変化に速度のちがいがみられる。標高の最も高いIII区では8月上旬までは繁殖期と変わらない鳥類相であり、冬鳥が優占種となるのはII区やIII区では10月の中旬であるのに対し、標高のより低いI区では11月になってからである。今後はこれに続く積雪の多い冬期の鳥類相の調査が課題である。

摘 要

- 1) 白山チブリ尾根の秋期の鳥類相を、1981年から1986年までの8～11月に線センサス法により調査し、3つの環境別に集計した。
- 2) 川原のドロノキ林及び草原にはホオジロ、ウグイスが、ブナ林にはゴジュウカラ、ヒガラ、アトリ、シジュウカラ、コガラ、ツグミが、ダケカンバ・アオモリトドマツ林にはヒガラ、メボソムシクイ、ウグイスが秋期全体として優占している種であった。
- 3) 冬鳥の渡来及び留鳥の一部の移動による鳥類相の変化が10月から11月にみられ、その時期や内容は各環境で異なっていた。
- 4) 調査期間中に記録した鳥は54種であり、ブナ林が全ての月で種数が最も多く、密度も高かった。

文 献

- 上馬康生 (1979) 犀川上流、高三郎山の鳥類(2)生息期間と個体数の季節変化。石川県白山自然保護センター研究報告, 第5集, p.67-86.
- (1985) 白山チブリ尾根の繁殖期の鳥類。石川県白山自然保護センター研究報告, 第12集, p.31-39.

Summary

The surveys on bird communities of Chiburi ridge in Mt. Hakusan by the method of line transect were made in autumn from 1981 to 1986. *Emberiza cioides* and *Cettia diphone* were dominant species in the lower part forest which consists of *Populus maximowiczii* and *Miscanthus sinensis*. *Sitta europaea*, *Parus ater*, *Fringilla montifringilla*, *Parus major*, *Parus montanus* and *Turdus naumanni* were dominant in the middle part forest which consists of *Fagus crenata*. *Parus ater*, *Phylloscopus borealis* and *Cettia diphone* were dominant in the upper part forest which consists of *Abies mariesii* and *Betula ermanii*. The total number of species was 54. The number of species was the largest and the density was the highest in the *Fagus crenata* forest during every month. The number of species and the populations changed during October and November due to the increase of winter birds and the decrease of resident birds.